

「柳津町上佐波地区の地形と土地利用及び生活」についての調査

華陽フロンティア高等学校 堀 英 男

1 地域調査に当たって(ねらい)

「身近な地域の学習」、いわゆる「地域調査」は、生徒が自分の目で理解できる地理的事象を取り上げて、それらについて自分なりに考えることができる学習である。生徒が地理的事象を直接に観察・調査できることから、学習指導要領の「体験的な学習を重視するとともに、生徒の興味・関心を生かし、自主的・自発的な学習が促されるよう工夫すること」に即応した重要な指導の場であると考えられる。

この学習では、身近な地域の事象を、位置、分布、その他の事象との関連で考察する能力や、縮尺の大きな地図の利用の仕方、統計その他の資料の活用の仕方とそれらの資料に基づいて適切な判断をする能力の基礎を養い、併せて、地域の変化についてまとめたり、発表したりする能力を育成することができる。

さらに、「身近な地域」の地域性を理解させることによって、生徒が生活している土地についての理解と関心を深めさせることができるとともに、その地域の発展に努力しようとする態度を育てることもできることなどから、地理的な見方や考え方を培う大切な学習の場であると言える。

加えて、「身近な地域の学習(地域調査)」から学んだ地理的事象は、今日及び過去の地理的諸条件において生み出されたものでもあり、そこに住んでいる人々の生活の様子の特色を理解するには、それらの成立の歴史的背景を考察することも必要になってくる。それだけに、「身近な地域の学習(地域調査)」において、歴史と関係の深い現在の事象の把握は、時間と空間の関係で理解することが大切であり、その観点からすれば、地理、歴史両分野にまたがる学習にもなり、ねらいを明確化することにより、一層学習効果を高めることができるものである。

そこで、「身近な地域の学習(地域調査)」では、本校が一級河川の長良川や木曾川に挟まれた地、そして付近を流れている境川などによって形成された後背湿地上にあることから、堆積地形についての学習テーマを設定した。本校周辺の岐阜市鶉から羽島郡柳津町佐波にかけては、古木曾川(現境川)の作った自然堤防が西部方面から湾曲して発達し、その上に集落ができた低湿地における集落と自然堤防との関係を示す典型的な例が存在することから、「柳津町佐波地区における自然堤防と土地利用及びその地域での生活について」の地域調査を計画した。

この地域調査では、地域の地理的諸事象の理解をさせることその他、さらに、平野部における河川などの生み出す一般的な堆積地形について理解させ、その中で河川の氾濫と移動によって作られた自然堤防の形成理由やその特色を考えさせることをねらいとした。地域の中にみられる地形や地域の人の生活様式を理解することにより、一般的な地形やその地形上に暮らす人々の全般的な態様の理解につなげていくことを試みた。

そして、実際の地域調査には、ルートマップとしての1/10000の柳津町の地形図、国土地理院発行の1/25000の「岐阜西部」の地形図を用意することにした。これは、野外に出たから地形図と現地とを比較したりする中で地理的事象をとらえたり、野外で得た情報と地形図との照合の中から「身近な地域」の特色を総合的に理解することができるからである。また、ルートマップと地形図とを対比したり、野外に出たから地形図と現地とを比較したりすることによって、地形図についてのルールを理解したり、地形図から地理的事象をとらえたりすることも可能になるからである。

また、地域調査で最も大切なことは、事実をよく見て、調べることであることから、観察・調査事項のそれぞれを確実に記録し、とらえることをねらったフィールドノート様式のプリントを準備した。そして、実際に調査する中で、生徒たちが調査・観察記録の記入、つまり気が付いたこと、考えたこと、疑問に思ったこと等を自由に記入できるようにした。

学 習 指 導 案

1 使用教材	教科書 詳説地理 B 最新版(二宮書店) 補助プリント 地図帳 高等地図帳 最新版(二宮書店) 地形図 1/25000(岐阜西部) 1/10000(柳津町)
2 指導単元	地域の調査と研究(- 柳津町上佐波地区の地形と土地利用及び生活について -)
3 単元の指導目標	1 身近な地域の生きた事象に関心を持つとともに、野外での観察や調査は地理学習にとって不可欠なものであることを理解する。(関心・意欲・態度)(知識・理解) 2 地形図の読図と野外調査の実施を通して、地域調査の方法や整理の仕方を習得する。(知識・理解)(表現・技能) 3 地域の調査を通して、地域の歴史を学ぶとともに、自然の特色や地域の変化を考察する。(知識・理解)(思考・判断)
4 単元の配当時間	1 地域調査の進め方 1時間 2 地域調査と研究 3時間 本時(1・2時間目/3時)
5 本時の目標	1 地図の利用と野外調査を通して、地域調査に興味・関心を持たせ、地域を積極的に理解する態度を身に付ける。(関心・意欲・態度) 2 自然堤防と後背湿地の特色と土地利用を理解するとともに、近年の土地利用の変貌を考察する。(思考・判断)(知識・理解) 3 集落内にある水屋や仏閣等への理解を通して、先人達の水害に対する工夫と取り組みを思考する。(思考・判断)(知識・理解)

6 本時の展開			
過程	学習項目(隣のねらい)	学 習 活 動	指導上の留意点・観点別評価
導入 15分	<ul style="list-style-type: none"> 自然堤防の位置を理解させる。 寺の場所を理解させる。 調査ルートを確認させる。 	自然堤防と後背湿地の場所の理解 地形図上の古木曾川(現境川)の自然堤防を着色する。 寺の場所の理解 地形図上で寺に印をつける。 地形図上で地域調査のルートの確認 地形図上にて調査ルートをなぞる。	地図上の自然堤防の位置や寺の場所、調査ルートを地図上で確認させることにより、地域調査への興味・関心を引き出す。(関心・意欲・態度) 上佐波地区集落が古木曾川の自然堤防上に位置していることを理解させる。(知識・理解)
	<ul style="list-style-type: none"> 自然堤防上の土地利用とその理由について理解させる。 	野外調査 自然堤防上の土地利用の理解 Q1) 自然堤防上はどのような土地利用がされているのか。その理由は。 <ul style="list-style-type: none"> 旧道や旧家(集落)は、自然堤防上にあることを理解する。 旧道や旧家の高さを、他の部分(後背湿地)と比べる。 旧家の礎石(石組み)の高さを測定する。 道標を見学する。 自然堤防は当時の重要な交通路であったことを理解する。 	<ul style="list-style-type: none"> 地形図と実際の調査場所とを対比させながら考えさせる。(思考・判断) 後背湿地へと続く旧家の礎石の高さの変化を概観させる。(思考・判断)

<p>75分</p>	<p>展</p> <ul style="list-style-type: none"> ・水屋の特徴と機能について理解させる。 ・寺と地域との結びつきを理解させる。 <p>関</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地域の発展と宅地化を理解させる。 ・地域の歴史を理解させる。 	<p>水屋の特徴と機能の理解 水屋を観察する。 水屋の礎石（石組み）の高さを測定し、母屋（旧家）と比較する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自然堤防上における水屋の機能や人々の生活の知恵を説明する。 ・家の財産を守る水屋の造りと役割を理解する。 <p>寺の役割の理解 等光寺の礎石（石組み）の高さを概観する。 等光寺の鐘楼を見学する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・洪水の通報や状況の掌握に貢献した鐘楼の役割について考える。 ・等光寺の鐘楼の歴史について説明する。 ・佐波地区の寺の多さを理解する。 <p>Q2) 後背湿地は、どのように、なぜ変貌してきたか。 玄番排水樋門を見学する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・玄番排水樋門の役割を考える。 ・水田からイチゴ栽培などへの後背湿地の土地利用の変化を理解する。 ・後背湿地への宅地化を理解する。 ・宅地化に伴う道路の整備を理解する。 ・堤防や灌漑の整備及び都市化の進行によって、住宅地が拡大してきたことを推測する。 <p>地域の歴史の理解 毘沙門堂、薬師堂を見学する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・毘沙門堂、薬師堂の場所が自然堤防上で、かつ部落の中心部であることを理解する。 ・毘沙門堂、薬師堂の歴史を説明する。 ・毘沙門堂、薬師堂の歴史と地域との結びつきを理解する。 <p>七墓地蔵を見学する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・七つの檀那寺を参ったという七墓地蔵の歴史を説明する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・旧家や水屋の礎石の高さを測定することにより、昔の水害の程度を推測させる。(思考・判断) ・水害との関係の中で、自然堤防上における水屋の機能や人々の生活の知恵を理解させる。(知識・理解) ・水害との関係で、鐘楼の役割について考えさせる。(思考・判断) ・水害時の緊急避難場所としての寺の重要性和地域との結びつきを理解させる。(知識・理解) ・排水樋門の役割を考えさせ、昔の水害克服の知恵を思考させる。(思考・判断) ・地形図との比較で、宅地や道路がどのように拡大・整備されてきたか考えさせる。(思考・判断) ・毘沙門堂、薬師堂の場所を、水害との関係及び村民の信仰の対象であったことから考えさせる。(思考・判断) ・神仏混合の禁止についても触れる。 ・村内の七つの寺を理解させることにより、寺の多さとその重要性を再認識させる。(知識・理解)
<p>10分</p>	<p>本時のまとめを行う。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・自然堤防と後背湿地の特徴及び土地利用とその変化、水害に備えた家造り、寺と地域との結びつきの歴史を復習する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・関心・意欲・態度・思考・判断・表現・技能・知識・理解の観点より行う。

3 地域調査を終えて

調査に先立ち、まず大縮尺の地図を活用し、自然堤防の位置を確認させた。国土地理院発行の 1/25000 の「岐阜西部」の地形図上において、岐阜市東鶉～中鶉～西鶉～柳津町上佐波～中佐波～下佐波にかけての地区を地形図上で着色させた。そして、その地区の土地利用はどのようになっているか、そして、どうして集落がこのように湾曲して集合しているか考えさせた。

また、新旧地形図を比較することにより、地域の変容の傾向や、地域を動的に把握することを実施した。古木曾川（現境川）の流路が、濃尾平野の堆積が進むにつれて次第に安定してきたことを理解し、現在と過去との土地利用等の変化を見いだす上で、明治 24 年に作製された地図と、現在の地形図を比較して読図することも大変有効な学習法であった。

さらに、調査対象地区の外観を把握するために、校舎の屋上から本校より南部地域を展望させ、大まかな土地利用の状況を把握させた。

実際の調査では、1/10000 の柳津町の地形図を使用して実際の調査に訪れるルートを記入させた上で、地形図を片手に、佐波地区の自然堤防上の道路を歩いた。そして、道路の状況や道標を始め、その地区に残る昔ながらの家の造りや建造物の特徴、地区に残る神社や仏閣などを観察した。

自然堤防上を歩くことにより、自然堤防上の土地利用の状況、つまり旧道や旧家（集落）が自然堤防上にあることを視覚的に理解させた。家の造りの特徴では、母屋や水屋の礎石（土盛り）の高さを測定し、水害に対する人々の知恵と工夫について考えさせた。また、自然堤防上の後背湿地が見渡せる場所に立ち、自然堤防の高さを視覚的に理解させるとともに、ボールを転がしてその傾斜を確認させた。

木曾川の古流であった頃の境川の様子については大まかな説明を行った。そのころの境川は、「暴れ川」と異名を持つほど氾濫を繰り返し、足近川の分派地点より下流の境川を、砂川（くずれがわ）と呼ぶほどであり、洪水のたびに流路を変えていたこと。やがて、1586（天正 14）年の大洪水により、古木曾川（現境川）は現在の各務原市前渡あたりで河口を土砂でふさがれて水脈を絶たれてしまい、それ以降は各務原北部を源とする小河川の下流となり、長良川の支流となったことを説明した。そして、この付近は木曾三川の下流域で、かつては日本でも有数の洪水常習地帯であったことを理解させた。

その上で、農業を中心とした近世までのこの地域の人々の生活は、水との闘いが生きるための闘いであり、洪水に対する伝統的な生活の知恵と、運命共同体としての地域住民の密接な結束によって成り立っていたことの理解へとつなげた。具体的には、古くからある集落は、自然堤防の上に固まっていて、輪中（古くは「くるまわ」と呼び、「周囲を丸く土手で囲った中の土地」のことを言っていた。）の周辺部を取り囲むようにできていること。自然堤防を利用したり、盛り土を利用したりして、少しでも高いところへ家を建て、洪水から人命や家財を守ろうと工夫したことなどについて説明した。

特に、水屋については、母屋の宅地面よりもさらに高い土盛りをして、石積みをして頑丈に造られていること。母屋が浸水しても、ここに食料や家財を蓄えることができたことを、実際の造りを見ながら理解させた。

途中、佐波 1073 番地の石柱に刻まれた道標（1914 大正 3 年）では、刻まれた方角を確認しながら、「南面 右かさまつ、西面 左ぎふ、右たけ鼻、東面 すのまた」となっていることを観察させた。そして、昔の主要街道の脇道が少しでも高い自然堤防上のこの地を通過しており、この地方に東西文化をもたらしていたことを理解させた。

等光寺では鐘楼を見学した。この鐘楼が常夜灯に似た形で 10 m の高さのところに理由について、水害との関係で考察させた。そして当時、この鐘楼からは一里（4 km）四方が見渡せ、洪水をいち早く村の人々に知らせるとともに、洪水の状況を掌握するのに絶好の場所であったことに気付かせた。

玄番排水樋門では、境川の排水を増すための玄番排水樋門の重要性を認識させた。そして、この後、玄番区域の排水を大江川幹線に導き、機械排水する目的で、玄番排水路の建設が、1933（昭和 8）年

に完成したことを説明し、この地域の排水施設が整い、排水機能が増していったことを理解させた。

また、水害との関係の中において、地域の歴史についても概観してみた。村民を守り、村が豊になることを祈願している毘沙門天立像が祀られている毘沙門堂、村人の無病息災を祈願して薬師如来立像が祀られている薬師堂、それらはどの場所にあるのかを、地図と対比させながら考えさせた。そして、信仰の対象で、たいへん重要なこれらの堂が、自然堤防上の部落の中心部にあることを理解させた。さらに、この堂への仏教美術品の集積が、1868（慶応4）年の太政官布告「神仏混淆の禁止」による神社所有の仏像の移転・安置によることについても触れておいた。

七墓地蔵の見学では、七墓の起源は、昔、村の代表となる7つの檀那寺をお盆の前に一日だけお参り、お墓の供養して回ったといういわれを説明する中で、当時の寺の多さと、地域との結びつきの中での寺の重要性を再認識させた。

最後に、境川の流路の固定と排水施設の整備、都市化の進行に伴う後背湿地の土地利用の変化について気付かせた。これまで水田地帯であった後背湿地は、新規道路の建設や既成道路の拡幅が行われるとともに、新興の住宅が建ち、広大な土地を必要とする公共的建物の新設・移転が行われ、減反政策の影響や農業での高収入をねらったイチゴのハウス栽培へと変化しつつある現状を観察する中で、後背湿地における土地利用の変化とその原因について考察させた。

生徒たちは調査途中で、様々なことに気づき、疑問を抱いた。以下には、生徒たちが途中でメモしたフィールドノートの一部を紹介する。「なぜ、防火水槽が多いのか。」「なぜ、民家の敷地内にお墓があったりするののか。」「なぜ、お寺が多いのか。」「なぜ、道路は細く曲がりくねっているのか。」などなどである。このように、生徒たちは野外調査を通して、いくつかの「なぜ？」という疑問を抱き、これがさらに新たな研究テーマとして掲げられることにもなった。このようなことは、実際に歩いて、見て、感じる野外調査でしか生まれてこない大変価値のある産物であると言える。

今回の野外調査を終えて、身近な地域の特徴を、地図と現地の照合 地形と土地利用との関係 人々の生活 地域の変貌について、ある程度総合的に生徒に理解させることができたのではないかと考える。

しかし、この調査を実施するにあたって、全般的な質や量の点をはじめ、学習項目や指導方法についてなど、まだまだ準備不足の点や荒削りの部分があったと反省する次第である。今後も一層、身近な地域での野外調査のテーマを追求し、いかに地理教育の教材として活用すべきかといった教材開発と工夫、さらにいかに指導したら効果的な学習ができるのかといった指導法の改善をしていかなければならないと痛感している。

参考文献

- 1) 興味・関心を高める身近な地域の指導 澁澤 文隆編 明治図書
- 2) わが町 やないづのなりたち 柳津町
- 3) 柳津町史 佐波編



1 防火水槽



2 水屋



3 旧家の礎石と道路（旧道）



4 自然堤防を横断する新道路（東）



5 畑の一角にある墓地



6 道標



7 屋敷内にある墓地



8 等光寺の鐘楼



9 水屋



10 通徳寺



11 玄番排水樋門



12 イチゴ栽培ハウス



13 毘沙門堂・薬師堂



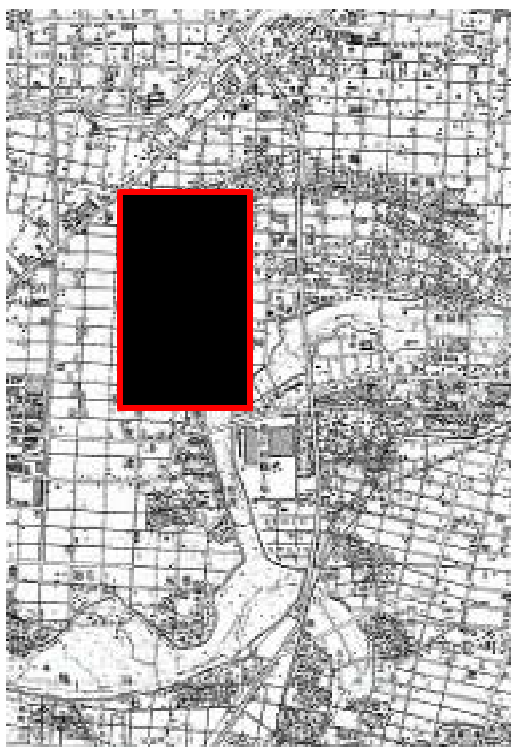
14 七墓地蔵



15 後背湿地の宅地化



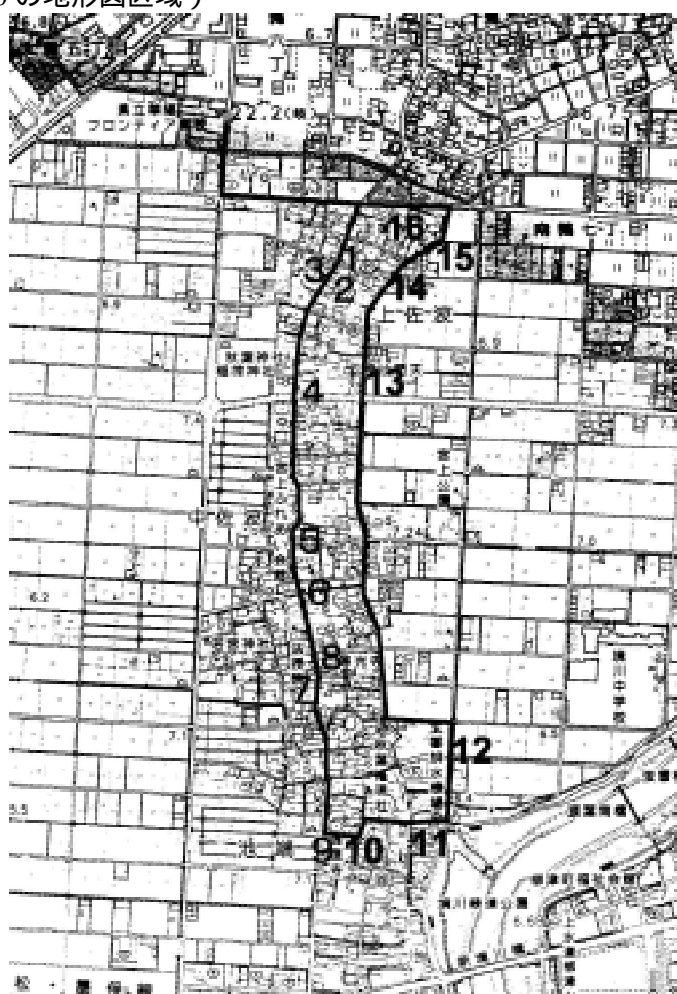
16 正蓮寺



1/25000 地形図「岐阜西部」
 (は 1/10000 の地形図区域)



明治 2 4 年の地形図



1/10000 の地形図と調査ルート (数字は観察地点・写真の番号)